

「受胎告知」

(ルカ1:26～38)

挽地茂男

2019.12.1 日本基督教団千歳丘教会礼拝

教会の伝統では、アドベントには「紫」の色が使われます。紫は祝祭的な赤とは違って、赤に青、ブルーの混じった色であります。主イエスの誕生をまつこのアドベントの季節、紫に混じったブルーを大切につつ、わたしたちの人生のブルー、悲しみや苦しみや不安を、クリスマスの華やいだ雰囲気の中に軽やかに覆い隠し、忘れ去ってしまうのではなく、また、それを大切に見つめつつ、それを通して、主を待ち望むことを学びたいと存じます。

わたしたちは先々週から、クリスマスにむかって、神様がこの世の小さなものたちを通して、救いの御業を実現して行かれる道筋をたどってきました。先々週は、ザカリアの老



夫婦の物語を読みました。先週はそのザカリアの老夫婦に神が授けた洗礼者ヨハ

ネの物語を読みました。今日は一人の少女、マリアの物語を読みます。マリアは、おそらく十代の少女で、当時の女性の平均的な結婚年齢は、十五、六歳だったと推測されています。多くの西洋絵画に見られるような、成熟した絶世の美女ではなかったでしょう。どちらかというと、目立たない質素な娘さん（ガリラヤのナザレ出身の[田舎娘とまでは言わなくとも]慎ましい娘さん）と言った方がよいでしょう。

首都エルサレムからは遠く離れた、ガリラヤの辺



境の小さな村の一人の乙女を神は救いの計画の器として定められたのです。無力だけれど神を畏れる〔敬虔な〕人々によって、神は、神の救いを実現させるのです。神の救いの業は、そのような僕たちを通して動き始めるのです。

今日の聖書箇所は「受胎告知」と呼ばれる場面で、天使がマリアに救い主を胎に宿したことを告げます。救いがこの世界にやってきた物語の始まりです。聖書はその場面を「神様の恵み」と「愛」にあふれ

た場面として、また、それに対する一人の女性の「静かな決意」(信仰)の場面として語ります。それはさながら一枚の絵のようです。再来週読みますヨセフの場合もそうですが、この決意の静けさがドラマです。またその静けさが信仰です。西



フラ・アンジェリコ「受胎告知」c.1430

欧の名画も、当然、この場面を逃さず描いています。有名な絵がたくさんあります。

フラ・アンジェリコの「受胎告知 (Annunciazione)」[c.1430年、サンタ・マリア・デレ・グラツィエ修道院]。レオナルド・ダ・ヴィンチの「受胎告知 (Annunciazione)」[ウフィツィ版、c. 1472-1475年]。そしてエル・グレコの「受胎告知 (Annunciation)」[c.1590-1603]。いずれも静かに動揺する女性の表



情が、多くのことを物語っています。中でも、マリアの表情に深みを感じさせるのは、サンタ



・マリア・デレ・グラツィエ修道院所蔵のフラ・アンジェリコ〔本名はGuido Pietro. Fra (tello) Angelicoは「天使のような修道士」という意味の通称〕の「受胎告知」です。

神の意志によってイエスを授かったことを、敬虔で控えめな態度で真摯に受けとめる聖母マリアの表現は、フラ・



アンジェリコの描いた他の「受胎告知」〔例

えば、プラド美術館の『受胎告知』や他の作家たち〔例えば、ダ・ヴィンチやエル・グレコ〕の「受胎告知」と比べて、より優雅で人間味が溢れているように思えます。

画面の左部分の遠景には、父なる神の怒りによりエデンの園を追放されるアダムとエヴァが描かれ、マリアの子イエスが、アダム以来の人間の罪の救済者であることを示唆します。また聖霊が、聖母マ

リアの頭上に輝きを放ち降臨しています。しかしすべての神の真実は、天使の伝えるメッセージがマリアの恐れと疑いを超えて、彼女の心の中で焦点を結び、マリアの真実としてその心を占める時、現実のものとは成るのです。

今日の物語の始まりは、さりげない仕方で福音の本質を描いています。

26－27節。「1:26 六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。1:27 ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった。」時間と場所が特定されます。時はザカリアの妻エリサベトの懐妊後、「六か月目に」、場所は「ナザレというガリラヤの町」。福音は、思想や観念ではなく、時間・空間の中に――つまり歴史的に――その姿を、具体的な姿で現すのです。神の定めた時、祭司ザカリアの妻エリサベトが懐妊して六ヶ月目、つまりザカリアに対する天使ガブリエルの告知が実現した



ことが明らかになったとき、同じ天使が、新たな告知をイエスの母となるマリアに届けます。エリサベトが産む洗礼者ヨハネはやがて主イエス・キリストの先駆け／露払いとなる人物であり、その母の懐妊からすでに救いの計画、神の計画が着実に前進しています。神がその救いを実現するために選ばれた場所、それはガリラヤ、イスラエルの最北部の地方、宗教文化的にはエルサレムおよびユダヤ教の主流からは侮蔑され続けた地域です。「異邦人どものガリラヤ」(イザヤ8:12, 1マカ5:15, マタ4:15) という呼び名は、ガリラヤが侮蔑の対象とされていたことをよく示しています。そのガリラヤのナザレという町、町と言うよりは村を、神は救いのドラマの舞台として選ばれたのです。「ナザレから何の良いものが出ようか。」ヨハネによる福音書1章46節は、ナザレがイスラエルの歴史では何の意義も持たなかったことを示します。ナザレは旧約聖書にもユダヤ教の聖典・タルムードにも全く登場しない辺境の地なのです。その神が定めた時と場所に、神の定めた人を通して神様の御業が動きだ

します。ヨセフと婚約中のおとめマリアです。物語の焦点は、**ガリラヤのナザレ**という地名から、特定の人物**マリア**へと絞られます。「マリア」という名前は、当時のユダヤ人の間では、ありふれた名前です。「高められた者」という意味の名前です。ヘブライ語ではミリアム、モーセの姉の「ミリアム」と同じ名前です。この名前に、マリアの両親は、神の祝福が豊かであるようにと、望みを託したのでしょうか。日本語で言うなら〈高子さん〉とか〈幸子さん〉でしょう。幸せな結婚をして、家庭を営むように神が高めて下さるように、と両親は思いを込めて命名したのかもしれませんが。彼女には許嫁がいました。婚約をして、人並みに幸せな生活に入っていく直前でした。ユダヤの女性は婚約して1年は実家で生活し、1年が明けると花婿が花嫁の実家に迎えにやってきました。花婿は、花嫁を花婿宅へと誘い、約1週間続く祝宴から新婚生



活へと生活を変えていくのです。その新たな出発の直前でした。結婚への不安と花嫁になる喜びが複雑に混じり合っていたでしょう。

しかし神は天使を通して力ある



フラ・アンジェリコ「受胎告知」(部分)



ダ・ヴィンチ「受胎告知」(部分)

姿を現されました。マリアの許に遣わされた天使の名はガブリエル。大切なみ告げ(神の計画)を伝えるときに遣わされる天使です。先々週のザカリアへの告知の物語の際にもお知らせしましたように、天使ガブリエルは、旧新約聖書に登場する大天使の一人です。ガブリエルは、旧約聖書のダニエル書(9:21-27)では、ダニエルに終末の預言を届けるために登場します。またルカ福音書でも、すでに祭司ザカリアに現れて、洗礼者ヨハネの誕生を告知しました(1:5-20)。そしてイスラーム(イスラム教)でも、大切に考えられている天使です。イスラームの創始者モハメット(ムハンマド)にコーランの言葉を与えた天使こそがガブリエル、アラビア語でジブリールなのです。

マリアに現れたガブリエルは、「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる」(v.28)と挨拶の言葉をつげます。すると「マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込」みます(v.29)。「おめでとう」という言葉は、「おはよう」、「こんにちは」、「いらっしゃい」(サム上1:18, 6:12)とも訳せる言葉で、元々「喜ばなさい」(Χαίρε)という意味の言葉なのです。しかし天使の伝えるメッセージ(v.30-33)は、簡単に喜べるメッセージではありませんでした。

ある注解書がマリアの恐れをこう説明していました。当時通俗化していた民間伝承(トビト書)に、ねたみ深い天使(悪魔)が初夜の晩に現れて、花婿を殺害するという迷信が一般化していて、ガブリエルとの接触はむしろ、そんな胸騒ぎを起こさせるような一種の心霊体験であって、婚約中のマリアは、婚約者に不吉なことが起こるのではないかと不安をつのらせた、と説明しています。しかし的が外れています。マリアの恐れは、ガブリエルの伝えたメッセージの内容そのものに起因しているので

す。マリアに伝えられたメッセージは、ふつうに考えれば喜べないもの、むしろショッキングな、恐怖を抱かせるようなメッセージです。天使の言葉はマリアの恐れを察知して、「恐れることはない」という言葉で始まります。このメッセージを聞きいて、マリアは「どうして、そのようなことがありえましょうか」(v.34)と否定的な反応を示します。この否定的な思い、つまりマリアの疑念は、天使の言葉を聞いている間中、マリアの心の中でどんどん大きく増幅していったに違いありません。30-33節。

1:30 すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。1:31 あなたは身ごもって男の子を産むが〔どうして、そんなことがありえましょうか〕、その子をイエ



スと名付けなさい。1:32 その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる〔どうして、そんなことがありえましょうか〕。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる〔どうして、そんなことがありえましょうか〕。1:33 彼は



永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない〔どうして、

そんなことがありえましょうか〕。」

マリアへのメツセージは、ダビデ王家に対する約束が、ダビデの子孫ヨセフ〔v. 27「**ダビデ家のヨセフという人**」〕の子イエスによって成就すると伝えるのです。しかしその王国は、政治的な王国ではなく、神の王国、霊的な王国なのです。マタイによる福音書の系図に見られるように、主イエスは「ダビデの子」（ダビデの子孫）として、王的メシアとして迎えられました。マタイの示す系図は——来週読む予定ですが——イスラエルの信仰と王権の興隆とそして没落〔バビロン捕囚〕を通して語る

王家の物語の縮図です。ついに十字架上で「ユダヤ人の王」として主イエスが処刑される時、地上の政治的支配としての王国の終わりを示します。と同時に、新たに樹立される王国、神の恵みと愛の支配する神の国の出現を、その復活によって宣言するのです。十字架と復活によって成就される救いは、政治や民族や文化によって分断されたすべての人を包摂し、包括するすのみならず、「王位」というもののもつその意味をも根底から再定義してしまうのです。それは、主イエスが、地上の王の着座する玉座ではなく、十字架という玉座に即位した王だからです。僕である王なのです。

「どうして、そのようなことがありえましょうか」（v. 34）。マリアの反応は、当然の反応です。彼女は、子どもが生まれるはずなどないことの合理的な理由をもっているのです。「**わたしは男の人を知りませんのに**」（v. 34）。男性経



験がない、であれば、当然子供が生まれようはずがない。しかし天使の言葉は、その合理を打ち砕いてしまいます。「**神にできないことは何一つない**」(v. 37)。「**聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。**」「**神にできないことは何一つ**



ない」とガブリエルは言うのです。それが証拠に、「あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもって

いる。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている」ではありませんか (v. 36)。「**神にできないことは何一つない**」のです。この表現 (οὐκ ἀδυνατήσῃ παρὰ τοῦ θεοῦ πάν ῥήμα) は、直訳すると「**神から出る言葉はすべて、無力に終わることはない**」という表現です。神の言が無力であることはいけません。神が光りと言われれば、光があるのです。世界は神の言によって創造されたのです。ですから、天使のみ告げをうけて、マリアの

答えが、「**お言葉どおり、この身に成りますように**」(v. 38)と続くのです。神の言は世界を造り、イスラエルの民の運命を導き、罪の深みに沈む人に救いと光を投げかけるのです。マリアの心に生じた戸惑いと恐怖の根源は、神の言と自分の合理の言葉の葛藤ととらえることができます。葛藤するのは当たり前です。しかし神の言が、今、マリアによって受け入れられていきます。静かな**決断**が生まれました。「**わたしは主のはしためです。**」(v. 38)。ここから**神の救いの歴史が始まるのです。神の御業が人を通して実現・前進し始めるのです。**救いはまだ見える形にはなっていません。しかしマリアの心の中で、まず、その決断の中に受肉したのです。

受胎告知から始まるイエス誕生の出来事には、見える部分と見えない部分があります。見える部分は、一人の女性が妊娠するという——彼女に男性経験がないということを除けばふつうの——出来事です。もちろん許嫁のいる一人の女性が結婚もしないのに妊娠したとしたら——時代によって性や恋愛・結婚に関する倫理的意識は異なりますが——人

々は彼女をふつうではない「ふしだらな女」とは見るでしょう。そしてユダヤ教の戒律に照らせば、マリアは死罪に値する罪人と判断されるでしょう。合理に従えば、そうなるのです。紀元2世紀後半のキリスト教批判者でケルソス〔ローマのプラトン主義哲学者〕という人がいます。彼が書いた『真理の教え』（177/8）というキリスト教の論駁書は、「イエスはマリアとローマ兵士との間に生まれた不義の子」とであると断じます。合理に従う限り、そうとでも考えるしか理解できないのです。〔この主張を使って武田泰淳が『わが子キリスト』という小説を書いています。〕

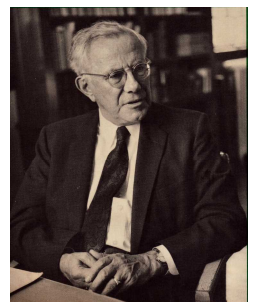
しかしこの出来事には、見えない部分があるのです。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。」「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。」神の恵みの力が今マリアに働きかけているのです。

〔でもそんな／どうして、そんなことがありえましょうか——と合理はにわかにその言葉を受け入れることができません〕。「あなたは身ごもって男の子を産む。」あり

得ないことが現実になるということです。〔そんな／どうして、そんなことがありえましょうか——と合理は言うのです。そんなことがあれば、わたしは不貞の女と罵られ処罰されるでしょう〕。「生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる」〔神の子を産むなんて／どうして、そんなことがありえましょうか——と合理は言うのです〕。合理の目、理性の目だけでは見えてこないのです。神様とマリアとの信仰的決断をかけたやりとりを経て、マリアは自分の身に起こること〔不合理・不条理〕を信仰の決断を持って受け入れたのでした。そしてこの信仰による受容が、全人類の救いの実現へと向かっていったのです。

やがて訪れる救いは子供の姿をとってやってきます。しかし誰が子供に救いを求めるでしょうか。救いは、わたしたちの目から隠されているのです。ある有名な神学者（Paul Tillich）がこう言っています。

救いは子供であり、成長して十字架にかけられる。



弱さの下に力を見ることのできる者だけが、
断片の中に全体を見ることのできる者だけが、
敗北の下に勝利を見ることのできる者だけが
苦難の下に栄光を見ることのできる者だけが、
有罪の下に無罪を見ることのできる者だけが、
罪の下に聖を見ることのできる者だけが、
死の下に生命を見る者だけが、



両親に抱かれて神殿にやってきた、
嬰兒のイエスを抱き上げて、神を称えた、あの年老いたシメオンのように言うことができる。「わたしはこの目であなたの救いを見た」(ルカ2:30 シメオンの賛歌)。祈りましょう。

(祈り) 父なる神様、わたしたちの教会を今日までお守り下さりありがとうございます。多くの不条理が渦巻いている世界にあって、わたしたちの希望、わたしたちのよりどころである、神様を共に礼拝する兄弟姉

妹が居ることを感謝します。それぞれがそれぞれの課題や辛さを持ちながらも、あなたに希望をおいて歩んでまいります。どうぞその歩みを、喜びをもって歩めるように祝福して下さい。この教会にわたしたちの言葉ではなく、主よあなたの言葉、あなたの御心になりますように。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

2019.12.1 日本基督教団千歳丘教会礼拝



1:26 六か月目に、天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に神から遣わされた。

1:27 ダビデ家のヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった。

1:28 天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」 1:29 マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。 1:30 すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。 1:31 あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。 1:32 その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。 1:33 彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることがない。」

1:34 マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」 1:35 天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だ

から、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。 1:36 あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。 1:37 神にできないことは何一つない。」 1:38 マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」そこで、天使は去って行った。

1·26 Ἐν δὲ τῷ μηνὶ τῷ ἕκτῳ ἀπεστάλη ὁ ἄγγελος Γαβριὴλ ἀπὸ τοῦ θεοῦ εἰς πόλιν τῆς Γαλιλαίας ἣ ὄνομα Ναζαρέθ 1·27 πρὸς παρθένον ἐμνηστευμένην ἀνδρὶ ᾧ ὄνομα Ἰωσήφ ἐξ οἴκου Δαβὶδ, καὶ τὸ ὄνομα τῆς παρθένου Μαριάμ.

1·28 καὶ εἰσελθὼν πρὸς αὐτὴν εἶπεν, Χαῖρε, κεχαριτωμένη, ὁ κύριος μετὰ σοῦ. 1·29 ἡ δὲ ἐπὶ τῷ λόγῳ διεταράχθη καὶ διελογίζετο ποταπὸς εἶη ὁ ἀσπασμὸς οὗτος. 1·30 καὶ εἶπεν ὁ ἄγγελος αὐτῇ, Μὴ φοβοῦ, Μαριάμ, εὗρες γὰρ χάριν παρὰ τῷ θεῷ. 1·31 καὶ ἰδοὺ συλλήμψῃ ἐν γαστρὶ καὶ τέξῃ υἱόν καὶ καλέσεις τὸ ὄνομα αὐτοῦ Ἰησοῦν. 1·32 οὗτος ἔσται μέγας καὶ υἱὸς ὑψίστου κληθήσεται καὶ δώσει αὐτῷ κύριος ὁ θεὸς τὸν θρόνον Δαβὶδ τοῦ πατρὸς αὐτοῦ, 1·33 καὶ βασιλεύσει ἐπὶ τὸν οἶκον Ἰακώβ εἰς τοὺς αἰῶνας καὶ τῆς βασιλείας αὐτοῦ οὐκ ἔσται τέλος.

1·34 εἶπεν δὲ Μαριάμ πρὸς τὸν ἄγγελον, Πῶς ἔσται τοῦτο, ἐπεὶ ἄνδρα οὐ γινώσκω; 1·35 καὶ ἀποκριθεὶς ὁ ἄγγελος εἶπεν αὐτῇ, Πνεῦμα ἅγιον ἐπελεύσεται ἐπὶ σέ καὶ δύναμις ὑψίστου ἐπισκιάσει σοι· διὸ καὶ τὸ γεννώμενον ἅγιον

κληθήσεται υἱὸς θεοῦ. 1·36 καὶ ἰδοὺ Ἑλισάβετ ἡ συγγενὶς σου καὶ αὕτῃ συνείληφεν υἱὸν ἐν γήρει αὐτῆς καὶ οὗτος μὴν ἕκτος ἐστὶν αὐτῇ τῇ καλουμένῃ στείρα· 1·37 ὅτι οὐκ ἀδυνατήσει παρὰ τοῦ θεοῦ πᾶν ῥῆμα. 1·38 εἶπεν δὲ Μαριάμ, Ἴδοὺ ἡ δούλη κυρίου· γένοιτό μοι κατὰ τὸ ῥῆμά σου. καὶ ἀπῆλθεν ἀπ' αὐτῆς ὁ ἄγγελος.